

子どもが開咬(かいこう)と診断されたら

くちびると舌のトレーニング[®]筋機能療法[®]で改善するケースも

シリーズ・歯の健康相談

夏休み前は、学校や幼稚園から、歯科検診の結果が届くシーズンでもありますね。学校の歯科検診では、歯並びのチェックも行われており、子どもが「不正咬(こう)合」として指摘されたことはありませんか。その中に「開咬(かいこう)」があります。これは上下の歯をかみ合わせても前歯がかみ合わず、すき間が開いている症状です。

開咬と指摘されたら、どう対応すればいいのでしょうか。「ほりい矯正歯科クリニック」の堀井和宏さんに詳しく聞きました。

開咬は、一見するときめ、上下の前歯の萌出(ほりい)位置にあり、ものを飲み込みに並んでいるようにうしゅつ(うしゅつ)が阻害されて、込込際に上下の前歯の間に見えることから、「生え起(おこ)る場合があります。舌が押し出されてくる替わりの途中かな」「その指吸い(さしひ)を行うお子さんの多くは、くちびるを閉じる力が弱かったり、わたって前歯が内側から口の中でいつも舌が低い押されると次第にかみ合

のでは、なぜ開咬になるのですか？
— 幼児期、就寝時に「指吸い」を行ったた



〈回答〉ほりい矯正歯科クリニック・堀井和宏さん

8歳女児の治療例。治療前(上)は、ものを飲み込む際に上下前歯の間に舌が押し出される状態。くちびるの閉鎖力の強化と正しい飲み込み方のトレーニングを行った結果、治療途中(下)のように開咬が緩和



筋機能療法の指導を行う歯科衛生士の砂子(すなご)さんと菰口(こもぐち)さん



ことが望ましいです。

治療法は？

— 取り外しのきく装置を装着することが基本となりますが、ケースによってはその前に、くちびると舌のトレーニングを行います。

わなくなり、歯が生えてくる骨(歯槽骨)の形状もこれに合った形にゆがんでしまいます。

このトレーニングを筋機能療法(MFT)といいい、弱いくちびるの閉鎖力を強化したり、口の中で舌を持ち上げる練習を行います。また、舌が前歯を押すことなくものを飲み込めるよう、順を追って舌の動きを練習します。

開咬による影響は？

— 前歯がかみ合わないため、発音への影響が出て舌足らずな話し方になったり、奥歯への負担が多くなり、将来奥歯を早期に喪失する原因の1つになると考えられます。

根気の要るトレーニングですが、上の写真のように、この筋機能療法だけで開咬がかなり改善するケースもあります。また、同療法を行っておくことで、装置を使った治療に移行した際の効果も高まります。

治療を始める時期は？

— 永久歯列でも治療可能ですが、なるべく乳歯が生え替わる少し前から混合歯列の間で開始する

治療を始める時期は？